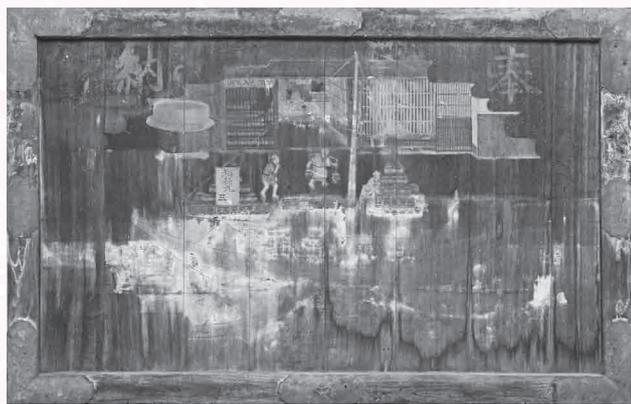


醤油醸造絵馬

—土浦の醤油造りを伝える
笠間稻荷神社の絵馬—

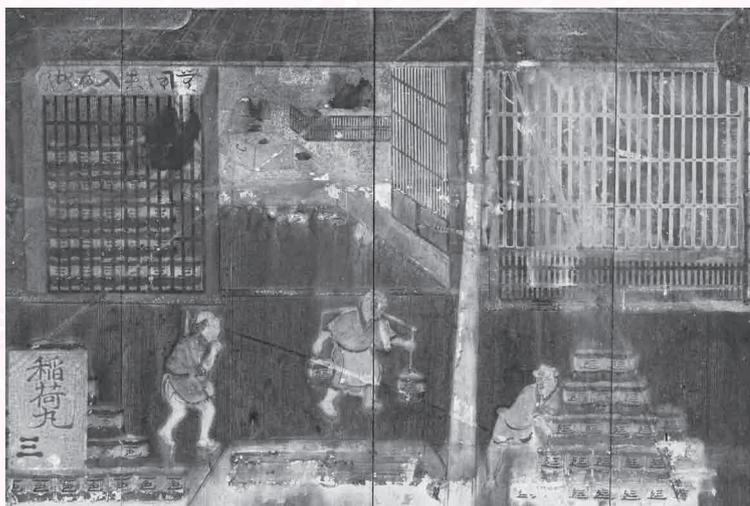
かつて土浦は醤油の醸造が盛んでした。江戸時代、国学者として大きな足跡を残した色川三中の生まれた家も、川口(現在の中央二丁目)に醤油蔵(工場)を構えていました。三中は、田宿(大手町)で営んでいた薬種屋の経営を立て直し、さらに醤油蔵でもさまざまな改革を行い、経営を安定させます。土浦で最初に醤油造りを始めた国分勤兵衛家(屋号大國屋)に次ぐ生産高を誇るまでになりました。

笠間稻荷神社(笠間市)には、色川家の醤油蔵が嘉永3(1850)年に奉納した絵馬が今も拝殿に掲げられています。博物館で開催中の特別展「次の世を読みとく―色川三中と幕末の常総」では、笠間稻荷神社の格別のご協力により、拝殿

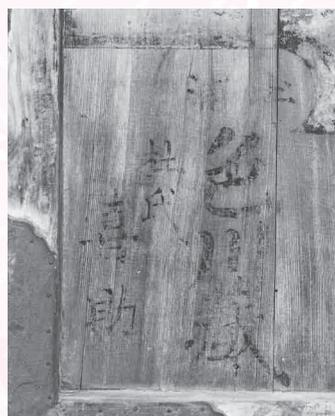


▲写真①醤油醸造絵馬

からこの絵馬を降ろしていただき、現在展示をしています。縦109センチ、横170センチという立派な絵馬です。長年の掲額で彩色こそ落ちていますが、色川家の醤油蔵から樽を出荷する様子が描かれています(写真①)。船は、霞ヶ



▶写真②同絵馬中央部分
▲写真③同絵馬左下部分



浦・利根川水運で活躍した高瀬船で、「稻荷丸」という船名まで書かれています。樽には、色川醤油のしるしである「三」の文字が見えます。

樽を運ぶ人の後ろには、店が見えます。中には熱心に帳簿をつける主人や使用人の姿がいきいきと描かれています(写真②)。軒先には「無用之者人へ(べ)からず(ず)」と書かれ、左側には大きな釜が見えます。防火用水かもしれません。

絵馬の右下には、群山という絵師の名が見えます。群山は地方を巡る遊歴の絵師だったようで、絵馬が作られた嘉永3年の7月に土浦に入り、8月から11月末まで色川家に滞在していました。特別展で紹介する色川三中の肖像も、群山の手になるものです。

絵馬の上には「奉納」の二文字、左上に「嘉永三庚戌年十一月廿五日」、下に奉納者名として「土浦色川蔵」と書かれ、蔵で醸造を担った杜氏の名も見えます(写真③)。書を書いたのは、三中の弟美年です。美年は11月24日の日記に「絵馬に文字を認めることを頼まれたので、川口に参る」と書いています。書の腕前を買っていた兄が弟に頼んだのでしよう。

江戸時代の土浦で盛んだった醤油造りの様子をこれほどいきいきと伝える絵画資料は他にありません。ふだんは高い位置に掲げられている絵馬をじっくりとみるまたとないチャンスです。ぜひ、博物館でこの絵馬をご覧ください。

■特別展「次の世を読みとく―色川三中と幕末の常総」は5月6日(水)まで。

岡市立博物館(☎824・2928)